
あたしは天下のオジョー様！

葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたしは天下のオジヨー様！

【NNマーク】

NN852N

【作者名】

葵

【あらすじ】

あたし、楠木日向！

ちょっとと風紀の悪い学校を仕切つてゐる
世間一般に不良つてヤツ。

あ、そこまでガラ悪くないから。
むしろ正義のヒーローだから！

そんなんあたしだけで、

ひょんなことから世界屈指のオジニー様になる」と云う。

ちゅうと、ちゅうと、ちゅうとー

あたしの生活がいつまでもちゅうのー！

第1話

いつやほー！
はじめましてー！

あたし楠木日向くすのきひなた！

中学から徒歩5分に住んでる14歳。

ピッチピチの14歳！

あ、2回言っちゃった。

とにかく今日から中学3年生！

もう気合い十分だよ！

制服バシッときまつてるし、気分上がる！

憧れの中3！

ついに、あたしが川中かわちゅうの女王おうおうにー！

説明がまだだつたね。
気分がよすぎて取り乱しちゃつた。

川中つていうのはあたしが通う川崎中学校のこと。
不良が集まつたご近所でも評判の中学校。
奥さまの井戸端会議でもよく出る話題。

よつするに不良の巣窟つてこと。
で、川中は代々中3の女子が支配することになつてゐる。
なぜかはあたしにもわからない。

川中フ不思議の1つ。

解明はされてない！

されてないからフ不思議なのか……。
ちなみに15代まで続いてる。

歴史長いよね。

で、その支配者を「いつ呼ぶ。

女王。

でね、その由緒ある女王にあたしが選ばれたの！

すっごく嬉しい！

だつてあの女王だもん！

テンション上がる！

今まで長かった……。

あたしが川中の支配者に！

ほんとダメ。

気分上がりすぎて死んじやう。

学校着く前に死んじやう。

あ、学校が見えてきた。

もうスキップだよ！

空までランニングできやうな気がしてきたよー。

空まで行つちやつたらそこは天国だけどね。

女王になる前に死んじやうけどね。

ああ、校門が華のゲートに見えてくるー。

ボロボロの校門にとりえ発見！

ううううともはいよーねー校門。

なんか廊下が赤い絨毯に見えてきた！
落書きだらけだけど、輝いて見える。

こんなに廊下つて素敵だつたのね！

「あ、こんちは。楠木さん」

怖やうなお兄ちゃんに頭を下げられる。

ノンノン！

あたしは「女王様」なんだから！

楠木さんなんて呼ばれるのも今日で最後！

そう思うとにやけてくる。

ああ、こんなどこでにやけてたら変人だわ！

メンツ台無しょ！

第3話

「もーすぐねえ」「

時計が指すのは8時半。

あとちよつとで女王任命式！

え、授業始まるんじゃないのって?
不良が授業出てるわけないじゃない!
たまに出てるけどや。

あたし、社会だけはできるんだよね。

あ、あと体育と音楽と。

ほかはダメダメだから出る気なし！

廊下を歩いてるとたくさんの人に頭を下げられる。

この崇拜度！

半端ないね。

ほんとにどつかの国の王女みたい！

ま、あたしは川中の王女なんだけどね。

いつもの音楽室へいく。

ここが不良のたまり場になつてる。

あー、今日もたまつてますね。

いつも以上にたまつてますね。

あつたり前よね！

だつてあたしの任命式なんだもの。

みーんな来るわよね。

来ないとどうなるかわからないしー。

御苦労さま。

「はーい、田向ひづち来な」

卒業したはずの15代田王女が手招きをする。
任命は元女王がすることになつてゐる。
わざわざ来てくれるんだよね。

ということは来年私がやらなきやいけないのか。
面倒だな。

「はい」

私は壇にあがる。

このボブの茶髪の綺麗なお姉さんが15代目。
いつみても綺麗でうらやましい。
形のいい唇を開く。

「15代田女王、桜がこの者を16代田と認める」

パチパチパチ！

大きな拍手があがつた。

みんなが祝福してくれている！

「あなたの名前は千影よ」

女王は名前では呼ばれることはない。
そんなの、恥になる。

だから、女王は新しい名をもつて。

この人も、桜という名ではない。
あたしの場合には千影。

千影……。

「あたしは千影！あたしが女王よ！」

皆が一斉に頭を下げる。

あたしは……16代田女王、千影よ！

第4話

「さうすが、ひな……千影様つー百合^{ゆり}感激です
「セウ？ ありがと」

このすうじかわいこ子は木下百合^{きのしたゆり}。
すうじく幼く見えるけど中^う。

そしてこの子も不良。

まったくセウ見えないんだよね。

背は低いし、声は高いし。

でも、不良。

「百合、一生千影様についてこきますー。
「遠慮しちゃいます」

一生ついてくるのは迷惑かも。

なぜかあたしにすうじくなつてこる。

謎だなあ。

ほんとにこれでいいのかな?

あたし、何度も同じことを思つてゐる。

百合、こんなにかわいいのに。

あたしについてきていいの?

間違つてる。

間違つてるよ。

百合は来ちゃいけない。

この世界に来ちゃいけない。

前に聞いたことあつたつけ。

不良でいいのつて。

そしたら田舎は言つたよね。
「これでいいんですね」つて。

笑つてた。

でも、すじく悲しそうだった。

問い合わせはしないけどさ。

不良には、いろいろあるから。
あたしだって例外じゃないし。
こういうことつて聞いちゃいけないの。
不良の中の暗黙の了解だから。

「ただいまー」

一日終わって家に帰宅。

今日はずっと頭をペコペコ下げられた。
気持ちはいいけど、ずっとつていうのはねえ。
なーんか変な感じ。

初日なんだし、当り前か。

今のうちに気に入られたいって考へてるのかな。

あたしも昔はそうだったし。

女王のお気に入りは、特典いっぴだからさ。

いろいろと便利。

次期女王も夢じゃなくなるし。

あたしは単純に桜様が好きだったから一緒にいたんだけどね。

「おかえり。さ、『J飯食べようか』

この男の人はあたしの叔父さん。

お父さんじゃなくて叔父さん。

お母さんの弟なの。

ちなみに名前は幸弘さん。
ゆきひろ

あたしのお母さんとお父さんは5年前に他界した。

不幸な火事だった。

隣の家の人の寝たばこが原因で、あたしの家に燃え移った。

あたしは一人になっちゃった。

そんなときに幸弘叔父さんがあたしを引き取ってくれた。

幸弘叔父さんはまだ結婚していないから、あたしと2人暮らし。

これはこれで満足してる。

叔父さんはあたしが不良なのを知ってる。

知ってるけど止めない。

止められてもやめる気はないけど。

なんでだろーね。

「あ、きんぴらごぼうおいしい！」

「この、ほうれん草もおいしいよ」

見ての通り、裕福とはお世辞にも言えない。
だけど、あたしはこれがいいの。

だつて、楽しいもん。

こんなご飯でもおいしいもん。

……すくなくとも、1人になることはないから。

1人ぼっちはもうやだ。

誰かと一緒に暮らしたい。

だからあたしは大満足。

「おはよー。幸弘叔父さん」
「ああ、おはよー。ひなちゃん」

今日は余裕をもって起きたことができた。
いつもは遅刻寸前。

授業にじやないよ。音楽室に。

だから朝ドタバタするのにも幸弘叔父さんは慣れてる。
だけど今日は6時半に起きたから、びっくりしてる。

モー、あたしをなんだと思つてゐるよー

「髪、ボサボサだよ。とかしておいで」

近くにおいてある手鏡であたしの現状を確認。
あー、これはひどい。

惨劇のあとみたいになつてゐる。

大きな鏡のある場所まで行つて、ブラシで丁寧に髪をとかす。
胸下まである焦げ茶の髪がいつもみたいに戻つていいく。
このままなおらなかつたら、どうしようかと思つた。
だつて、これじゃ学校にも行けないよー

あたしも一応髪を染めている。

金髪とかは嫌だから、焦げ茶を選んだ。

ほんとは黒いままでよかつたんだけど、やつぱりそれはね。
不良の威儀が台無しになつかけつからつて言つられて染めたの。
それに、幸弘叔父さんの迷惑になつたくなかったし。

「こつてきまーす」

8時になつたから家を出る。

家の前には百合。

「千影様…おはよつゝぞれこまわ」

「……」

「何でいるの？」

あたし、別に約束してるわけじゃないし。

そもそも百合に住所教えたつけ？

この子、もしかしてストーカー？

「百合、ずっと待つてました」

何分待つてたの？

いつからいたの？！

聞けない……。

怖くて聞けない。

ていうか、待ち伏せの間違えじゃない？

「危険ですから、百合が行きと帰りをご一緒にさせていただきますー」

「御遠慮させていただきます」

……この子、やっぱり危険だわ。

今すぐ警察に……！

「ちよ、ちよっと！」

「おじやーん、お金あるんでしょお？お小遣いちよーだーい

近くの路地から話し声が聞こえてきた。

「百合、静かにして」

1人で話を進める百合をひとまず黙らせることに成功した。

「ほーー。いつあいあるじやーん」

路地をそつと覗く。

そこには制服を着た2人の男子学生。

あの制服は……。

「紀乃川中ですね」

いつの間にか横にきていた百合があたしが答えを出す前に言った。

「紀乃川中……。

あそこは、最悪の中学校。

あたしたちの学校と近いけど、仲はものすんぐ悪い。

何かあるたびに喧嘩してる。

だって、本当にあの中学校は最悪。

あたしが女王になったからにはあの学校はつぶしてやらないといけない。

そう考えてたけど、早くもあいつらと会つことになるなんて。

偶然にもほどがあるわ。

朝から騒動起こして。

ほんつとうに面倒な奴らだわ。

あたしがぎつたんぎつたんにしてやる。

「百合、下がつてなさい」

「いえ、百合が行きます」

下がつてなさいって言つたのに、百合はあの2人の前に躍り出た。あの子……。あたしの命令を無視したわね。

「なんだあ、お前」

「こいつ、川中じやん」

「へえー結構かわいいし

「じゃ、お前、おれたちと来ないー?」

2人がケラケラ笑う。

ふざけんじやないわよ。

あんたら、百合をなめてるんじゃないの？

「こーんなにちっちゃくて、かわいくても、百合は喧嘩強いよ。馬鹿にするんじゃないわよ。」

「朝からなんですか！？ いちいちめんどくせこことをしてつ。本当に暇人ですね。千影様と百合の邪魔をしないでください。最後の方に変なキーワードを見つけたけど置いておいて。」

百合は2人の紀乃川中の男を睨みつける。

結構迫力あるんだよね、こいつの百合って。

「おい、何生意気なこと言つてんだよ」

「後で泣いても知らないからな」

さつきのケラケラ笑いをやめて、百合に殴りかかる。

2人で殴ろうなんて卑怯な奴だわ。

そんなの、百合のハンデにはならないけどね。

「その言葉、そつくりお返します！」

百合は軽く体を右に傾け、相手の拳をよける。

クリーム色で、かたにつくかどうかぐらいの髪がさらりと揺れる。こんなときでもかわいいね、百合は。

百合が鉄拳を顔面にたたきこむ。

2人はその場に崩れ落ちる。

馬鹿だなー。

あんたらみたいなのが百合にかなうはずがないじゃん。

「こりたら学校にさつさと戻つてください」

敵にまでその敬語を止める事はない。

でも、そんな丁寧な言葉づかいが怖い。

恐怖心をあおる。

「ひ、ひいー！」

2人は転がるように逃げて行つた。

あ、本当に転んだ。
相当焦つてるわね。

「千影様！」

百合があたしのところまで戻つてくる。

「あたしの命令ぐらい守りなさい」

「すみません。あんな奴ら、百合で充分だと思つたので……」

しゅんとなる。

そんな顔されたら、許してしまいたくなる。

いつもいつもそう。

あたし、この顔に弱いのよ。

「いいわよ。そんなに気にする必要ないわ」

あたしはあの2人にからまれてた男の人に向つて手を差し出した。

「大丈夫？」

「あ、ありがとう」

その人は、スーツを着ていて、会社員かなんかだと思つ。ひょろつとしていて、ふちなじの眼鏡をかけている。

「君、名前は？」

「聞くときはそっちから名乗りなさいよ」

失礼ね。

マナーぐらいい守りなさい。

「私は渡辺幸助」

「あたしは千影」

男の人があーマークを頭に浮かべている。
当たり前よね。

千影、としか名乗つてないんだもん。

ふつうは楠木日向つていわないといけないんだけど。
でも、あたしは千影。

「あたしは千影」

もう一度言つ。

この瞬間を渡辺つていつ男の頭に刻み込むよつて。

「千影様、百合はよるといろがあるので先に行つててください」

学校に着いて、音楽室に向かう途中、百合はながついて
にこやかにあたしの傍を去つて行つた。

嵐みたいな子ね。

あわただしいつたらないわ。

「はやく戻つてきなさいよー」

廊下をダッシュする百合に向つて手を振つた。

「はいー。すぐ戻りますから

」

ぶんぶんと手を振り返す百合。

手、とれるわよ。

「あ、千影さん」

音楽室の前で待機する1人の不良。

昨日見たスキンヘッドの兄ちゃんじゃない。

名前は……。なんだつけ？

忘れちゃつた。存在感あんまりないからなー。

「原田です。今日、新入生をつれできましたんんで」

原田だ。

思い出した。

あ、これじゃ思い出したに入らないかな。

「新入生かあ」

こつちも忘れてた。

新入生の選別やらないと。

うちの不良軍団に入れるかどうかの。

毎年恒例のイベント。

まあ、ほとんど入れちゃつてるけど。

人数多いことにこしたことはないしね。
だから、不良が増える一方。

え？ 卒業するからプラマイゼロだつて？

そんなことないわよ。

あたしたち川崎中学は矢野高校つていう高校と
同盟みたいなのを組んでいる。

実質は主従関係みたいなんだけど。

だから、高校の方に中学の時の不良がにたまつていぐ。
高校じゃ、単位とらないと卒業できないからね。
そのせいで、どんどんたまつていぐの。

「おい、千影さんがきたぞ！」

原田が音楽室の扉を開けた。

パチパチパチ。

昨日みたいな盛大な拍手が上がる。
あたしは胸を張つて堂々と不良たちの前を通り過ぎ、
用意されてる豪華なソファに座る。
まあ、豪華つてほどじやないけど。
あたしたち不良にはもつたいたいかも。
お、みたことない顔がちらほら。
こいつらが新入生ね。
あー、今年は女が多いわ。
嬉しいけど、戦力にならないと無意味だしな～。

「すみませーん」

甘ーい声がドアのほうから聞こえる。
この声は。

「百合です。遅くなりました」
やつぱり百合。

「で、後ろにいる子は？」

皆が警戒心いっぱいにならみつけているのは、百合の後ろに
隠れてる、誰か。

不良……じゃなさそうね。

「百合の従妹の月夜です。実はいろいろあつて……。
この子もうちに入れてほしいんです」

百合は申し訳なさそうにうだなれる。
そつちは後で聞くとして。

あたしが気になつたのは別の方。

「月夜、あたしの隣に座りなさい」

「ひに来るようになつてみる。

ちらりと見えた髪がとつてもきれいだった。
どうな子なのかな？

「は、はい！」

百合の背中からすつと出でくる。

なんだ、そこまで内氣なわけじやないのね。

「わ、私、みやべつきよ富部月夜といいます」

さらつと、腰まである金髪が揺れた。
染めてるんじやなさそ。

あの金髪は自前ね。

少しウエーブのかかつた髪。
すつじく綺麗。

そして、目。

透き通るよつな青。

海みたいに深いけれど、空みたいに鮮やか。
金髪に青い目。

この子、もしかして……。

「あなた、ハーフかなんか？」

近くまで来た月夜に尋ねてみる。

月夜はビクッと肩を震わせた。

「千影様！ハーフって言つのは禁句……」

「ハーフだなんて言わないでくださいーー！」

百合の静止の声を上回るほどの大声であたしに怒鳴りつけた。

あ、あたし、何か変なこと言つた？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9852z/>

あたしは天下のオジョー様！

2012年1月1日21時47分発行